

## 商学会賞受賞報告

第10期 石井 隆太

### ◆商学会賞とは？

商学会賞とは、「慶應義塾商学会賞」を正式名称とし、慶應義塾大学商学会が年に6回隔月で発行する学術雑誌である『三田商学研究』の学部生版であり、同学会が年1回発行する『三田商学研究学生論文集』に掲載を許可された論文に与えられる称号のことです。商学部に所属する学部生なら誰でも投稿することができますが、すべての投稿論文が掲載されるわけではなく、商学部教授陣の審査を経て高い評価を得た論文だけが、その学術的価値を評され、「慶應義塾商学会賞」受賞論文として称えられつつ、掲載許可を得ることができます。1979年度に設置されてから今年度で36回目を迎える、伝統ある榮譽ある賞です。2013年度より、共著人数の制限が3人から6人に引き上げられたのに伴って、11月の締切には40を超える論文が投稿されるようになりました。小野ゼミでは、12期の歴史の中で30本が挑戦し、うち18本の投稿論文が受賞・掲載の榮譽に浴しています。



昨年度の商学会賞の様子。委員長である堀越先生から賞状を受け取る著者と同期の磯邊さん。著者は、一番奥。

#### ◆投稿論文の概要

投稿論文のタイトルは、「製造業者と流通業者の組織間成果に対してデュアルチャネルが及ぼす影響」です。本論文は、「なぜ、製造業者と流通業者が協力することによって高い成果をあげる場合と、そうでない場合があるのか？」という問いに対して、新たに「製造業者が直接チャネルを設置しているか否か」という観点から解答を試みました。製造業者は、自社製品を流通させるために、他社の流通業者に加えて、自社の流通部門を用いることが多く見受けられます。このように、他社の流通業者という販売チャネルと、自社の流通部門という販売チャネルをもっている製造業者は、自社の流通部門を通して、自社製品を流通させるための知識やノウハウを得ていると考えられます。本論文は、こうした知識が、製造業者と流通業者の組織間成果を高めることにつながるのではないかと仮説化し、141の企業からデータを収集して分析を行いました。

#### ◆商学会賞を受賞して

この度、私の投稿論文が、審査を無事にパスして、商学会賞を受賞すると共に、『三田商学研究学生論文集 2014 年度号』に掲載されることになりました。先生をはじめ、お世話になった先輩・後輩の皆さんには、この場を借りて深く感謝いたします。

私は、一昨年前に書き上げた卒業論文に、企業データを分析した結果を加えて、今年度の商学会賞に投稿しました。昨年度の三田祭論文の受賞・掲載に引き続き、2年連続でこのような栄誉に与ることができたことは、非常に嬉しく思います。特に、今年度、大学院進学準備期間として1年間を過ごした私にとっては、このような論文を投稿する機会は、良い目標の1つになりましたし、投稿を通して色々と学ぶことができる重要な機会にもなりました。

ゼミに入って学術研究の面白さを知った人にとっては、このような学生論文集に投稿できるチャンスがあることは、大変ありがたいことです。全国の大学を見渡しても、そもそも、商学会賞のような賞を用意している大学は意外と少ないようです。実際、慶應の他学部には、このような賞は設置されていないようです。さらに、ありがたいことに、慶應の商学部は、賞を設置するのみならず、投稿された論文を『三田商学研究学生論文集』という学術誌として公刊しています。そのため、ただただ投稿された論文を評価するだけでなく、トップジャーナルと呼ばれる世の多くの有名な学術誌と同じように、公刊されるまでには、「査読」と「校正」というプロセスを経験することができます。

査読では、商学部の先生方のうち1名が、自分の論文を読んで、学術論文として公刊するのに相応しいか否かを評価してくれます。全体的には良い評価を受けたとしても、多くの場合には、論文を修正するよう指示されます。論文を修正する際には、査読をしてくれた先生（＝査読者）の意向をきちんと読み取り、それに対して適切に修正がなされなければ、掲載が許可されることはありません。ですから、この査読に対する論文の修正作業には、細心の注意が必要です。この査読というプロセスを経験してみると、学術論文として掲載されるまでには、論文を書き上げるだけでなく、書き上げた後にも努力がなされているの

だということを実感します。一方で、査読者の努力も忘れてはいけません。商学会賞では、慶應商学部の先生方が、日々の仕事で忙しい中、投稿された論文を丁寧に読み込んで、論文に対するコメントをしてくれます。論文を読むのは一回きりではなく、修正作業が終わり、再投稿される度に、読んでコメントしなければなりません。これまで読んできた世の多くの学術論文には、著者や査読者の、こうした隠れた努力もなされているのだということがよく分かるのではないかと思います。

査読を無事に終えて、掲載を許可された論文には、校正というプロセスが残されています。『三田学生論文集』を発行しているのは慶應義塾大学出版会ですので、実際に公刊されるまでには、出版会の人と何回か校正のやり取りを行います。おそらく、多くの学部生は、校正なんて経験したことがありませんから、これにも学びが多いはずです。例えば、校正を行う際には、校正刷に対して赤字で修正指示を施すわけですが、このときに使用する校正文字というものがあります。ご存知のとおり(?)、小野先生がゼミ生の論文に対して、「トル」、「ツメ」、「ママ」などのカタカナを使って添削をしてくれるのですが、こうした文字も、実は、正式な校正文字なのです。修正方法が分かればよいのですが、せっかくの機会ですので、校正文字も覚えて、そして、小説家や記者にでもなった気分で、自分の論文が公刊される前に推敲をするというのは、なかなか楽しいものです。

『三田商学研究学生論文集』は、その名の通り学生(=学部生)の論文集ですが、掲載されれば、商学会賞という称号や副賞である賞金の他に、多くの学部生は経験しえないような経験をすることができます。慶應商学部生だからこそ経験できる貴重なことですので、今後も商学会の一事業として継続され、そして、ゼミの後輩の皆さんには、是非とも積極的に挑戦してもらい、これを通して多くの学びを得てくれることを願っています。



昨年度の商学会賞受賞記念写真。著者は2年連続の受賞。(著者は後列左から4番目)